

Title	<書評>菅靖子著『イギリスの社会とデザインモリスとモダニズムの政治学』
Author(s)	太田, 喬夫
Citation	デザイン理論. 50 P.188-P.189
Issue Date	2007-05-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52961
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

菅 靖子著

『イギリスの社会とデザイン モリスとモダニズムの政治学』

彩流社 2005年

太田喬夫

本書は、19世紀から20世紀前半を中心とするイギリスの近現代デザイン史を扱った研究書で、注や文献表を含めると472頁にも及ぶ大著である。

デザイン史研究は、従来、装飾的デザインや手仕事から機械に象徴される簡素な抽象形態のモダニズムへ向かって進化するという単線進化論型や美術史に準じた著名デザイナーの系譜（たとえばペヴスナーの『モダン・ムーヴメントのパイオニアたち』）が主流であったといえるが、今日では、ポストモダンの動きやニューアートヒストリーの動向に合わせてジェンダー、ポストコロニアル、文化人類学、カルチュラル・スタディーズなど、さまざまな視点から、多様なアプローチが試みられている。そのなかで本書は、デザイン史研究の新しい一つのモデルを呈示した野心的な著作である。本書は、現地での一次資料の綿密な調査・読解を基礎に、デザインの母体、背景となる産業、社会、政治との連関を綿密に考察しようとしている。また、ナショナリズムとデザインという、扱い方によっては難しい問題を穏当なバランス感覚を示して、的確にアプローチしている。

「イギリスは（産業）デザイン・コンプレックスを持った国」という前提から本書のデザイン史の物語は始まる。イギリスは、最初に産業革命を経験し、また、「ウィリアム・モリス」や「ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館」、さらには「ウェッジウッド」といったものを生み出したことから、工芸デザインの先進国の一つと思われがちだが、よく見れば、デザイン・コンプレックスに長く悩

んできた国だというわけである。一般的な見方と実状とのこのギャップの成立と展開が、本書の目指すものだと思う。手仕事と職人のクラフトの伝統は根強いが、ドイツ工作連盟やバウハウスのような機械による大量生産やインターナショナルな機能主義造形デザインには、弱い。この両者の戦い、せめぎあいの過程が、極めて綿密な文献調査によって明らかにされている。

本書は、第1部 デザイン・コンプレックスの国イギリス、第2部 アーツ・アンド・クラフツとモダニズムのはざままで、第3部 国家とデザイン、第4部 ウィリアム・モリスの遺産、の4部からなる。第1部では、大英博覧会（1851）やパリ万博（1855）などでイギリスのデザインが酷評されたことから、コンプレックスの意識が強まり、その克服の過程で、モリスが「よき趣味」の指導者として登場する。ヴィクトリア朝の装飾デザインの「悪趣味」「キッチュ」に代わって、モリスにおいて、イギリスのナショナル・スタイルが形成されたという。第2部では、モリス没後のモリス商会によるアーツ・アンド・クラフツ運動とモダン・デザイン運動、あるいはモダニズムとの対立あるいは共生の過程を扱う。第3部では、万博をはじめとする国際展でのイギリスのデザインの展示の問題が扱われる。国家とデザインの関係に焦点を当て、国家がモダン・デザインに介入し、これを体制化していく過程が明らかにされる。第4部では、モリスが文化的遺産となる過程を、モリスの自宅であったレッド・ハウスの受容の歴史に即して、ナショナル・トラストとヘリ

テージ産業の視点から考察する。

以下、書評士がおもしろいと思った点、問題と考えた点をいくつか挙げておきたい。

1. 「デザインのデザイン」とも「デザインの演出」ともいえる「展示」が本書の別の意味での中心テーマであると思う。アートもそうであるが、人はものを作り表現するが、作られたり表現されたものは何らかの場、空間において、あるいは何らかのメディアを介して、何らかの他者に見られる。作者や国家は、見て貰いたいという欲望を潜在的にももっているものだ。「展示」は、クラフト及びデザインを制作者から消費者・受容者に媒介する場であり、デザインが社会的意義を有する具体的場である。したがって展示は、政治学、地域性、美学というものと結びつく。展示そのものは作品とは違い、モノとして残らないのでその評価、意義は、デザイン史においても従来、十分究明されてこなかったといえる。しかし、展示現象は、近代及び美的モダニズムにとって本質的な行為であり、社会的出来事でもある。ミュージアムやエキシビション、ショールーム、さらには個人住宅のモデルハウスや室内空間等、それぞれの成立理由をデザイン史の中で問うことは、重要だと思う。ある意味、極めて私的な空間としての趣味の空間が、田園生活のユートピア空間から、今日では、ヘリテージ産業と結びついた文化遺産的空間に拡大しているところが、おもしろい。少し詳しく見れば、趣味空間（室内——他人に見せるための展示空間でもある）と工房（ワークショップ、教育と創造の連携の場）から出発し、理想の住まい（顧客に疑似体験させるため、絵画、彫像、工芸品をセットで展示。1908年にロンドンで「理想の住まい」展が開かれる。初のモデルハウスの展示場）や百貨店のショールームやショー・ウィンドーを経て、万博会場やナショナル・トラスト（レッド・ハウスというデザインのヘリテ

ジ。ひとつの恒久展示空間）へ至るプロセスを追うことが出来る。ロンドンに1989年開館した、「デザイン・ミュージアム」もヘリテージの性格を強く帯びる。その対極は、絶えず、仮設での最新の商品を販売目的で行う展示、たとえば、国際的なショー、メッセであるといえる。

2. 1930年代のイギリスで、モダニズムが、主にドイツの亡命芸術家・デザイナーを受け入れることによって、強まったという指摘は、おもしろい。これとの関連で特に第9章が興味深かった。ここにドイツ工作連盟およびバウハウスのモダニズムが、ライマン産業・商業美術学校の展示デザインに反映され、イングリッシュのモダンな展示デザインが成立することが解明された。ライマン・スクールの成果は、30年代に世界的にも展示デザインの理論と実践が注目されるようになった（キースラー、リッツキー、バイヤーら）動向の一環として捉えることが出来る。

3. 問題点のひとつは、著者も指摘しているが、イギリス、イングリッシュネス概念である。「イギリスというのは、いわば想像の共同体である」。グラスゴー、スコットランド、北アイルランドなどでのデザインの近代化との違いは、やはり気になる。

4. 問題点を一つ：18世紀に趣味の概念がイギリスにおいて深まったことは、近代美学史で周知のことであるが、この概念は、より深い考察を必要としているように思う。純粋芸術よりも工芸デザインの分野でより重視されたのかどうか。当時のイギリスの美学・哲学と工芸デザインとの関係は、どうであったのか。趣味概念は、現在でもイギリスで有効なのか。ドイツの近代化との比較で、趣味概念は興味深いし、問題であり続ける。

なお、本書は、利光功によっても書評されている（『デザイン史学』第4号2006）。